ドレーン排液色のスケール表作成

key word　スケール　ドレーン排液色

集中治療部　○榎本由佳　國高努　鍋島由希　向山聖美

はじめに

集中治療部には術後の患者が多数入室している。術後合併症の中でも後出血は患者の生命に直接関わる緊急性の高い合併症であり、術後の観察において、迅速な判断が必要となる。ドレーン排液色の認識は、看護師の主観的判断で表現の相違や見解が違うことが現状としてあり、申し送りの際に聞いたドレーン排液色と、自分で見たドレーン排液色の表現に違いがあったため、表現統一が必要ではないかと思った。一般的な色彩カラースケールを用いた先行研究はあったが、排液色を用いた研究は少なかったため、T医科大学病院集中治療部看護師を対象に、ドレーン排液色をどのように表現しているのか調査し、スケール表を作成した。

＜用語の定義＞

ドレーン排液色：手術後に留置されるドレーンから排出される血液成分の色

Ⅰ 目的

1．ドレーン排液色が、どのように表現されているのかを明らかにする。

2．ドレーン排液色のスケール表を作成し表現の統一化を図る。

Ⅱ 方法

1．対象：T医科大学病院の集中治療部に勤務している看護師49名

2．期間：2009年9月1日～10月15日

3．調査方法

1）ＲＣＣ・ＦＦＰを用いて暗血性～プラズマの排液サンプルを作成しカラー写真を撮る。（図1）

2）カラー写真の排液サンプルを看護師に、順不同に見てもらい、ドレーン排液色を自分の言葉で記入してもらう。（質問紙調査１回目）

3）質問紙調査１回目の結果より、多かった表現の数種類を用いて性状スケール表を作成する。（図2）

4）スケール表を２週間使用後、２)と同様に質問紙調査を実施する。（質問紙調査２回目）

5）スケール表の必要性の有無及び使用後の感想について自由記載してもらう。

4．回収率

１回目質問紙調査：回収率75.5％　37人

２回目質問紙調査：回収率67.3％　33人

Ⅲ 倫理的配慮

本研究の主旨を説明し、同意の得られた者を対象とした。収集したデータは研究以外には使用しない事とした。本研究は、東京医科大学倫理審査会の承認を得ている。

Ⅳ 結果

＜スケール表使用前　ドレーン排液色の表現方法＞（表１）

１の排液サンプル：７種類の表現があった。血性が22人（59.5％）と半数以上であった。

２の排液サンプル：12種類の表現があった。淡々血性15人（40.5％）、淡々血性～プラズマ９人（24％）であった。

３の排液サンプル：４種類の表現があった。淡血性21人（56.7％）、淡々血性14人（37.8％）と淡血性が半数以上であった。

４の排液サンプル：８種類の表現があった。プラズマ20人（56.7％）と半数以上であり、黄色５人（13.5％）であった。

５の排液サンプル：6種類の表現があった。淡血性19人（51.3％）、血性６人（16.2％）であった。

６の排液サンプル：11種類の表現があった。プラズマ12人（32.4％）、黄緑5人（13.5％）、黄色・淡緑色は4人（10.8％）であった。

７の排液サンプル：7種類の表現があった。淡々血性20人（54.0％）と半数以上あり、淡々血性～プラズマ5人（13.5％）、淡血性と淡血性～淡々血性４人（10.8％）であった。

８の排液サンプル：10種類の表現があった。暗赤色10人（27.0％）、血性8人（16.2％）、淡血性6人（13.5％）であった。

９の排液サンプル：4種類の表現があった。淡血性19人（51.8％）、淡々血性14人（37.8％）であった。

10の排液サンプル：8種類の表現があった。暗血性20人（54.0％）、血性10人（27.0％）であった。

質問紙調査１回目の結果から、排液サンプルのはっ

きり区別しにくい色は、個人によってプラズマ～淡々血性、淡々血性～オレンジ、プラズマ、黄緑等の色彩表現・性状表現が混同していた。 色彩・性状表現だけでなく混濁・コアグラ等の表現があり、40 種類の表現があった。

質問紙調査 1 回目の結果を元に、多かった表現（暗血性・血性・淡血性・淡々血性・プラズマ）を用いてスケール表を作成した（図 2）。スケール表を 2 週間使用した後、質問紙調査 2 回目を行った。

＜スケール表使用後　ドレーン排液色の表現方法＞（表 2）

質問紙調査回答数、33 人であった。そのうち、スケール表使用による回答は 9 人、未使用による回答は２４人であった。

①の排液サンプル：3種類の表現があった。暗赤性が4人（44.4％）、暗血性3人（33.3％）、血性2人（22.2％）であった。

②の排液サンプル：5種類の表現があった。淡々血性4人（44.4％）、オレンジ2人（22.2％）、淡黄色1人（11.1％）淡々血性～プラズマ1人（11.1％）、プラズマ～オレンジ1人（11.1％）であった。

③の排液サンプル：2種類の表現があった。淡血性5人（55.5％）、淡々血性4人（44.4％）でほぼ同率であった。

④の排液サンプル：４種類の表現があった。プラズマ6人（66.6％）、漿液性1人（11.1％）、淡黄色1人（11.1％）プラズマ～黄色1人（11.1％）であった。

⑤の排液サンプル：2種類の表現があった。淡血性8人（88.8％）、血性～淡血性1人（11.1％）であった。

⑥の排液サンプル：5種類の表現があった。プラズマ3人（33.3％）、黄緑3人（33.3％）、黄色1人（11.1％）、薄黄緑1人（11.1％）、淡々黄色１人（11.1％）であった。

⑦の排液サンプル：1種類の表現であった。淡々血性9人（100％）であった。

⑧の排液サンプル：4種類の表現があった。暗血色4人（44.4％）、血性3人（33.3％）、暗血性～血性1人（11.1％）、暗赤色1人（11.1％）であった。

⑨の排液サンプル：2種類の表現があった。淡血性6人（66.6％）、淡々血性3人（33.3％）であった。

⑩の排液サンプル：4種類の表現があった。暗血性5人（55.5％）、暗赤色2人（22.2％）、血性1人（11.1％）、暗黒色1人（11.1％）であった。

スケール表使用後、質問紙調査 2 回目では排液サンプル色の表現は 19 種類であった。スケール表は性状表現を提示したが、オレンジ・黄色・暗赤色等の性状表現以外の色彩表現があった。スケール表使用前後の表現数は減少していた。（表 3）

スケール表を使用した人の感想・意見としては、「今まではっきりとした指標がなく、どう判断すれば良いのか分からない事があったが、見本としてあると表記しやすい」「統一して性状を認識することができる」「スケール表がある事で、迷わず色（性状）を表現できて良かった」「写真があったので分かりやすかった」「迷った時に、性状が統一されていたので判断しやすかった」等であった。

また、改善点としての意見では、「スケール表が同じ色に見えた」「スケール表のどの色にも当てはまらなかった」などがあげられました。

スケール表を使用しなかった理由は、「ドレーン挿入患者を受け持たなかった 8 人 」「スケール表があることを知らなかった　9 人 」「使用するのを忘れていた 6 人 」「忙しい　1 人 」「無回答　1 人 」があげられた。スケール表を使用しなかった 24 人中 18 人はスケール表が必要であるとの答えている。その理由として、「人によって色の区別に違いがある為スケール表が必要」「個人差を最小限にできる」「看護師の主観に頼らず統一した記録が残せる」「自分が客観的に見えているか不安だから」「前勤務者と異なったら不安になる為スケール表があった方が良い」「主観だけでなく基準があった方が統一されて分かりやすい」「評価基準を統一するためにもスケール表は必要だと思う」「データと同じように客観的指標が必要である」等の意見があった。

V 考察

排液サンプルの質問紙調査 1 回目では 40 種類と色彩や性状での多様な表現があることが分かった。そのため、看護師間での排液スケールの統一が必要ではないかと考えた。質問紙調査 2 回目の排液スケール表使用後の結果で、排液の表現数が 40 種類から 19 種類へ減少したことは、研究対象者個人が排液スケール表を使用する事を意識した為ではないかと考える。

また、質問紙調査 2 回目で看護師の排液スケール表使用の有無に関わらず、「排液スケール表の必要性がある」と意見を述べているため、表現を統一する為には排液スケール表が必要であると考える。

今回の研究では、排液スケール表で 5 種類の性状表現を提示したが、色彩表現も混在していた。スケール表の使用期間が 2 週間と短く、スケール表を使用しなかった人の意見として「ドレーン挿入患者を受け持たなかった」「スケール表があることを知らなかった」などの回答があった為、スケール表使用期間の見直し、スケール表活用の周知徹底が必要であったと考える。またスケール表を使用した人から「同

じ色に見えるものがあった」「どの色にも当てはまらなかった」等意見があり、排液スケール表作成にあたり、プラズマ・淡血性・淡々血性・血性・暗血性よりも多くの性状表現を検討した方が良いのではないかと考える。

Ⅵ まとめ

1．今回の研究により、看護師のドレーン排液色表現は、性状・色彩表現に特定せず、多様な表現がされていた。

2．排液スケール表使用後、表現数の減少が見られたが、排液スケール表を使用した人の割合が低いため、排液スケール表使用により統一されたとは言えない。

今後は、集中治療部内でのドレーン排液性状表現の統一をするため、見やすく使いやすいスケール表の見直し検討をしていきたい。

参考文献

1）市村カツ子，齊藤やよい．血性排液をデジタル画像化した比色カードの検討．日看研究．23（3），391，2000.

2）小野真奈巳，齊藤やよい．形の違いによる看護婦の血性表現への影響．日看研究．23（3），393，2000.

3）長谷川暁子，三隅順子，塚田睦美他．臨床経験の有無による色の認識の違い．日看研究．20（3），120，1997.

4）河内美江，内海滉．彩色液体を用いた看護婦の色彩認知の研究．群馬県短紀要．5 17-25，1998.

5）密山大志，土屋総一郎，西村順也他．臨床経験、職種の違いによる色調選択の一致率について．日本補綴歯学誌．43，162，1999.

6）大納康子，齊藤やよい．表現選択理由からみた色表現基準づくり．日看研究．23（3），394，2000.

7）岡寄直子，齊藤やよい．看護記録における生体モニター別色表現用語の実態調査．日本看護誌．23（3），392，2000.

8）齊藤やよい，小池潤．色彩学的にみた看護職者の色表現の実態. The kitakanto Medical Journal．51（1），40，2001.

9）坂口瑞枝．試験管内の血性排液の色表現に関する検討. 日本看護協会学会雑誌. 21(3)，230，1998.

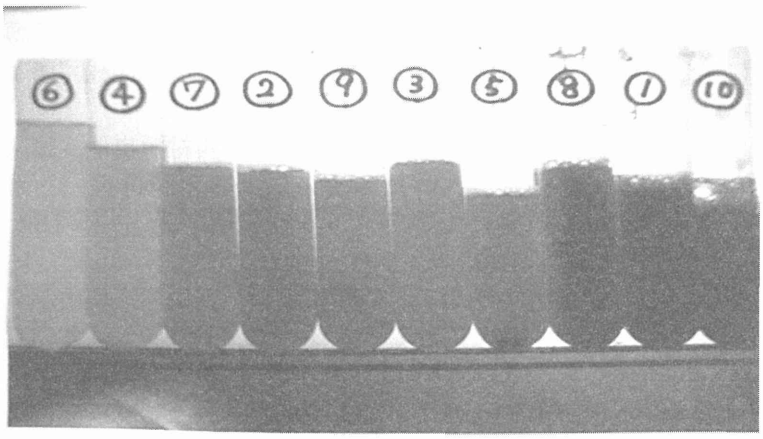

図1　排液サンプル

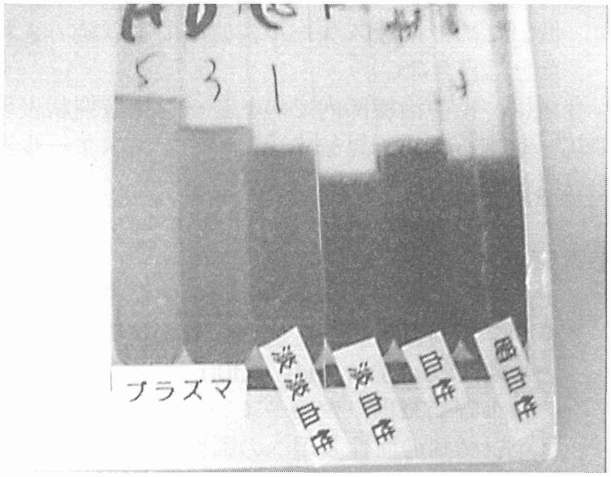

図2 作成したスケール表

表1　スケール表使用前ドレーン排液色の表現方法

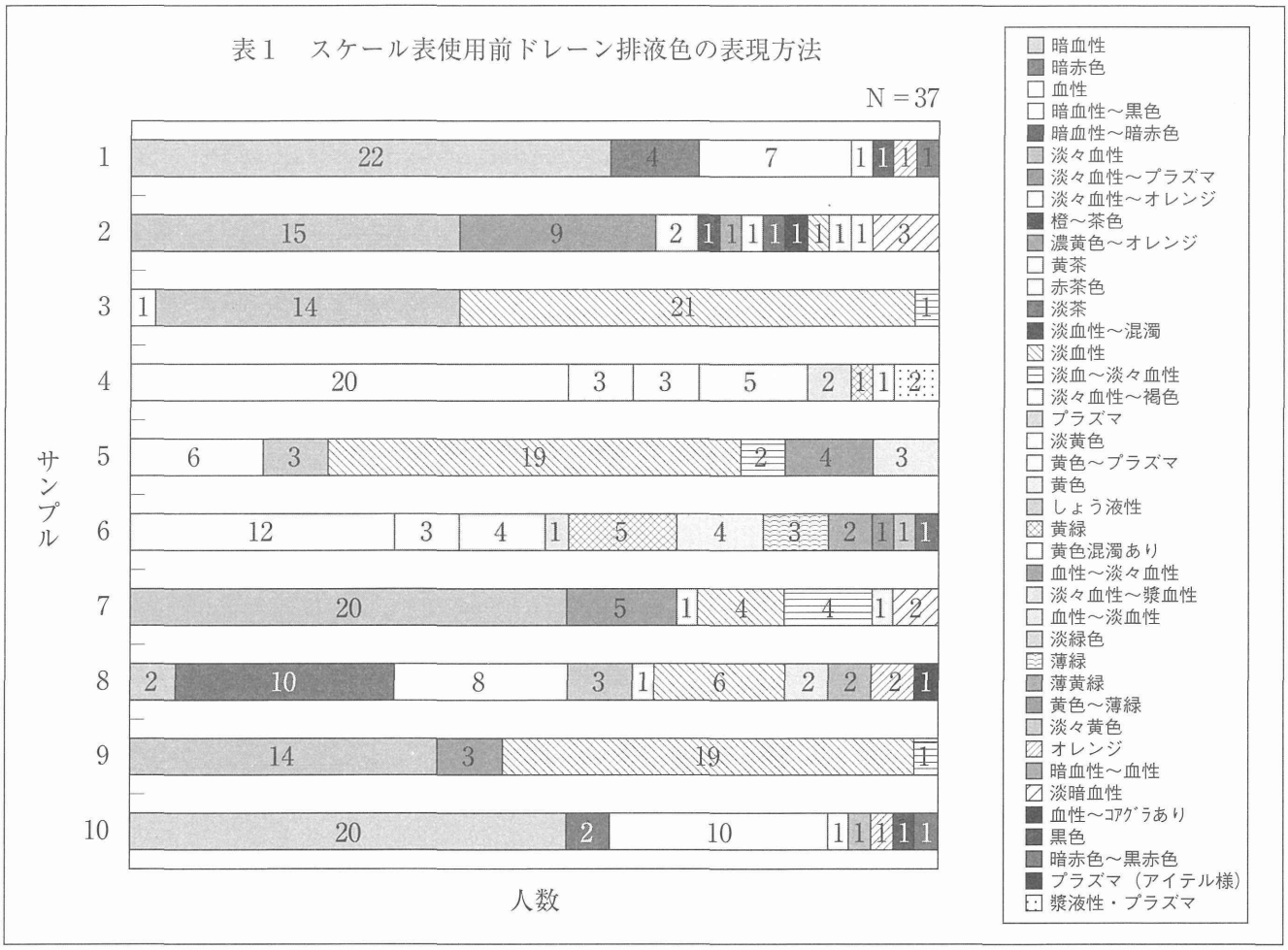

表２　スケール表使用後ドレーン排液色の表現方法

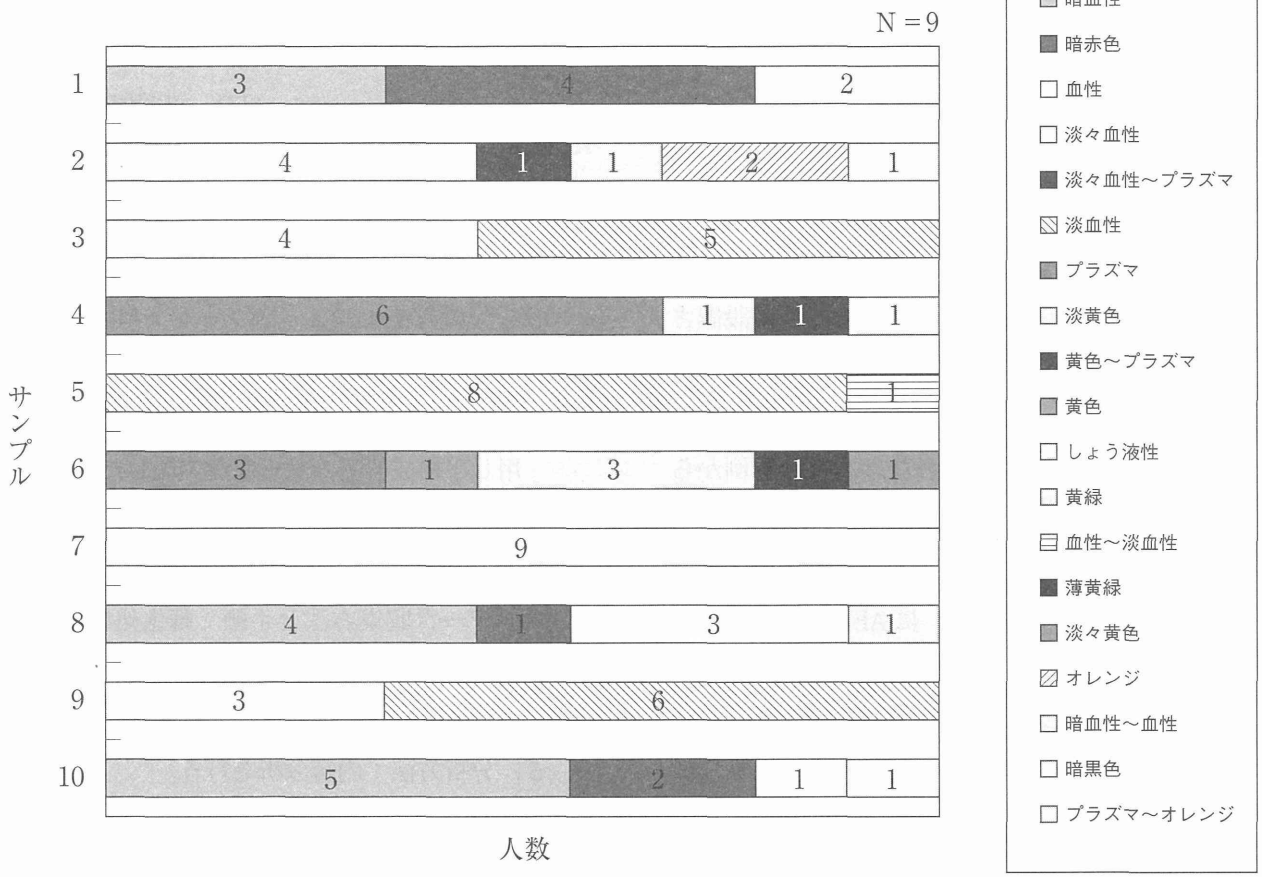

表３　スケール表使用前後の比較

サンプル	質問紙１回目 （スケール表使用前）	質問紙２回目 （スケール表使用後）
1	７種類	３種類
2	１２種類	５種類
3	４種類	２種類
4	８種類	４種類
5	６種類	２種類
6	１１種類	５種類
7	７種類	１種類
8	１０種類	４種類
9	４種類	２種類
10	８種類	４種類
表現数	４０種類	１９種類